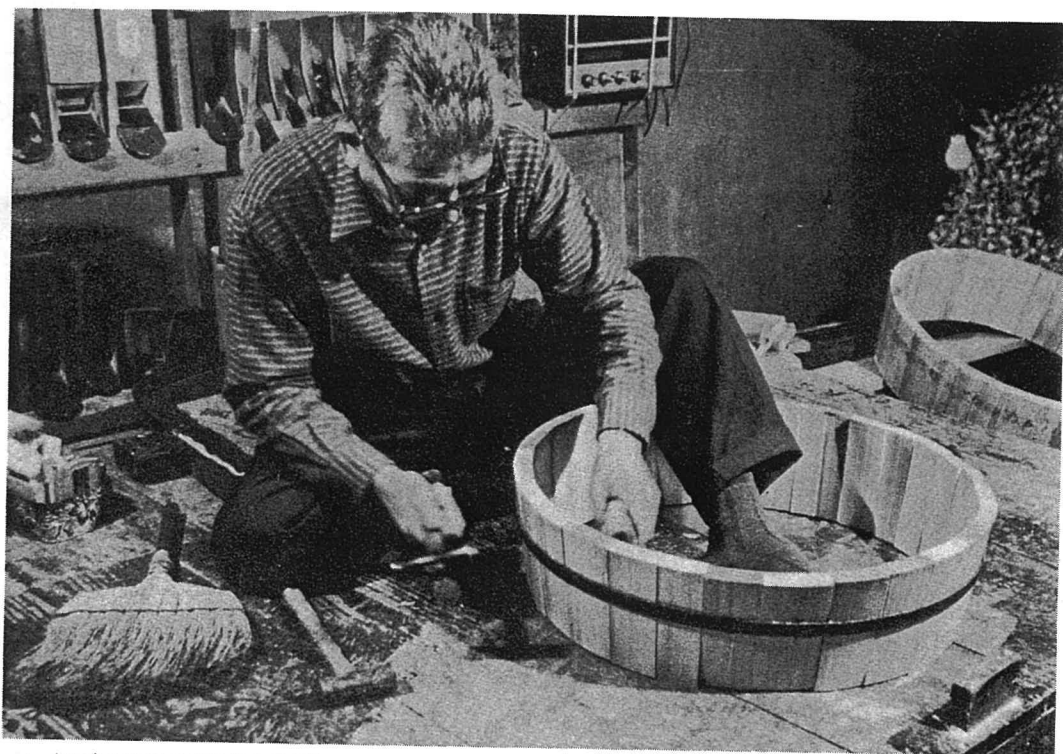


民俗博物館だより

Vol. XV No. 2
1989. 3. 31



▲ 桶づくり(橿原市南大久保)

目 次

桶屋のカマ(鎌)―無形民俗資料ビデオ収録調査抄―	1
民俗資料聞き書き短信 ―民具と伝承に関する報告―	
⑦菅原神社の秋祭り(大宇陀町田原)	3
⑧牛耕についての聞き書き ―生駒市南田原―	5
⑨天川村沖金の民俗聞き書き	7
短信 ―民俗博物館へのおたより― ・お知らせ	9

桶 屋 の カ マ (鎌)

大 宮 守 人

— 無形民俗資料ビデオ収録調査抄 —

桶づくりに必要なもの、それは良材の吉野杉と100を越える道具、それにこの道具を使いこなす技である。

今回、当館の映像収録事業の一環として収録した桶づくりの伝承技術の中から、桶職を使う独特の道具であるカマ（鎌）にスポットを当て、その機能を紹介しよう（写真1）。

桶職のカマは、刃物の鎌に似た姿をした、桶を構成する樽の接合面の角度を合わせるスケールである。正直しょうじきと呼ばれる、台鉋ながだいを中央にはめ込んだ長台くれに樽を1つずつ押しつけて削り、その後へカマを当てて角度を見る（写真2・3）。

この作業を横で見ている限りにおいては、ただこれだけの事かというようなものであるが、実はここに桶という生活用具製作のエッセンスが隠れている。

カマの機能として(A)桶の寸法（直径）によって変わる樽の接合面を測る。(B)樽のオチ（上下幅の窄み具合）を測る。この二機能である。(A)の機能は、写真2のようにカマを当て、図1-①になった時を「カマが強い」、図1-②になった時には「カマが弱い」と言い、それぞれ正直で削って修正をする。前者では正直の左側（削る方に向って）後者では右側で削る。

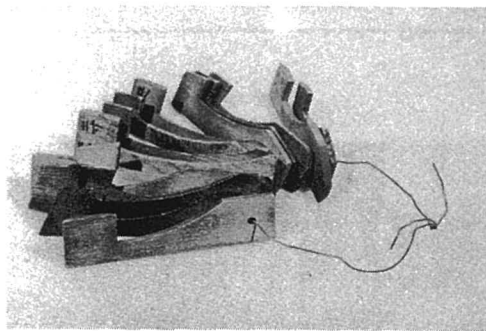
これは、正直の刃が山形に仕立てられているためである。

また(B)の機能は、カマの上端又は側端（樽の幅によって使い分ける）を樽の上下端に当て、オチの加減を見る。オチは、樽の上端内寸と下端外寸を一致させるのを標準とする。上端内寸と中央外寸を一致させればオチのキツイ桶が出来上がる。このようなカマの使い方をカマガエシという。

カマを樽に当てて計測する部分は面取り加工を施して厚味を無くし、見易くしている。

桶の円弧を構成する個々の樽を規格化するスケールとしてのカマとその切削用具である正直は、曲物と桶との製作技術の格差、つまり、桶は理論的な技術、曲物は自然発生的な

技術であることを表わしているようだ。



▲ 写真1 カマー式



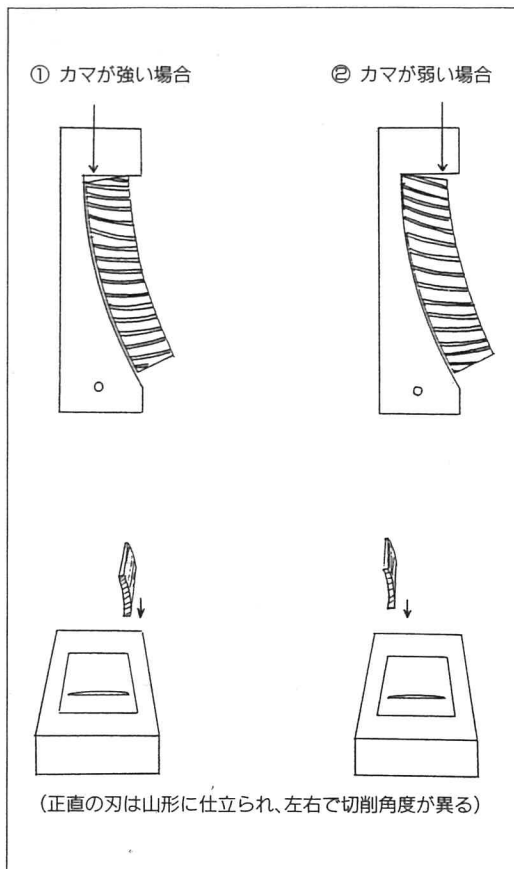
▲ 写真2 カマを当てる



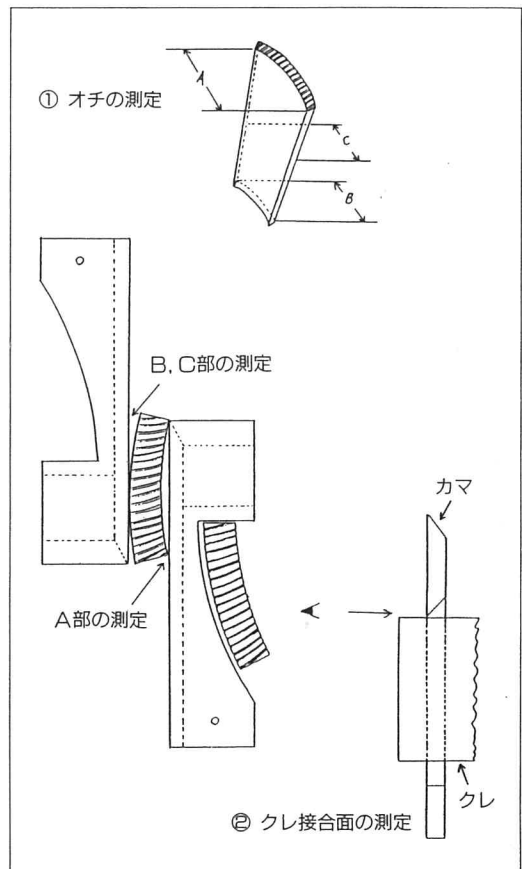
▲ 写真3 正直で削る



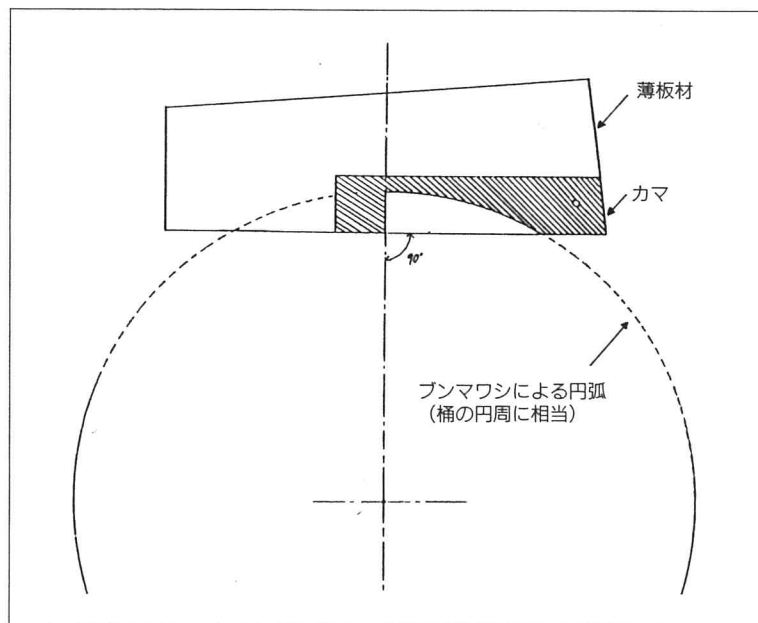
▲ 写真4 樽を組む



▲ 図1 カマによる測定と正直による接合面の切削



▲ 図2 カマによる測定法



▲ 図3 カマ製作における木取法

7 菅原神社の秋祭り(火祭り) — 大宇陀町田原 —

大宇陀中学校 2年3組
細川 富士子

田原の神社

田原の神社は菅原神社といい、あの有名な、菅原道真をまつてあります。

とても、あたまのいい神さまだそうです。

梅鉢もあり、田原小学校の校歌にも、こんな歌詞で歌われています。

「鎮守のお宮の梅鉢は学びの神の天神さま」

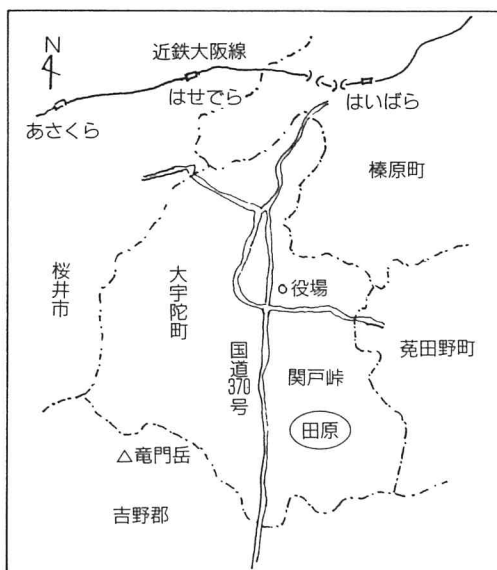
道真公は梅を愛する人だったので、田原の家紋は、ほとんどの家は梅鉢となっています。

神社のまわりには大きな木が多くて、よくかみなりが落ちてしまいます。そのため、枯れた古木の杉もあります。大へん古い神社です。私は、この神社がとても好きです。

しかし、7月に、桃山時代につくられた、こま犬さまがぬすまれてしまい、村の人達は、大へん困っています。

菅原神社の秋祭り

菅原神社の秋祭りは、このへんではめずらしい火祭りです。



▲ 大宇陀町田原の位置

祭りやそれ以外の村の行事は、ほとんど宮宿(とうや)が中心となって、行われます。

田原は、上(かみ)と下(しも)とにわかれています。それぞれに、宮宿があります。

宮宿は順番制で、それぞれの家にまわっていきます。私の家は去年、宮宿でした。

もとの話にもどりますが、秋祭りには、たいまつを燃します。大だいまつ、小だいまつの2種類です。

宵宮(よみや)の田原は、たいまつの行列ができ、とてもきれいです。

10月24日が秋祭り、23日が宵宮となっています。宵宮が本番です。

10月21日(宵宮2日前)の仕事

2日前から本格的な祭り(宵宮)のしたくが行われます。主に、ごくにする米あらい、あまざけづくりです。この日は、宮宿(とうや)の家へ、あまざけづくりをする人、相宮宿(あいとうや)の人が集まります。

相宮宿とは、来年宮宿をつとめる家のことです。たくさんの米(もち米)をあらうのは1日ばかりです。

あまざけは、宵宮の午前中までかかります。

10月22日(宵宮1日前)の仕事

ごくつき、大だいまつづくりをします。

この日は、宮宿の親せきの人、かいとの人、相宮宿の人が宮宿に来ます。

村の大人の人は、ほとんど来ます。

21日にあらったたくさんの米で、もち(ごく)をつきます。これも1日ばかりです。

宮宿の家の中は、米をむしたりなどで、とてもあついです。それでも、みんなたのしそうです。

男の人は、大だいまつをつくります。

小だいまつをたばねてひもでくります。

★小だいまつのつくり方(宮宿がします)

3月の末ごろに、国に許可をもらって、麻の種をまき、育てます。7月の末ごろには、

麻は、2 m～3 mほどまで育ちます。それをかりとり、大きな池みたいなのをつくり、麻を水につけて、くさらせます。麻をつけるときには、葉を全部とります。その葉は、毒なので、警察の人たちのみている前で、穴にうめなければなりません。1枚ものこしてはいけません。

1～2週間つけておくと、麻の皮だけがくさります。麻の皮をむきます。きれいにすつとむけ、きれいな白い色を見せます。でも、くさらせてあるので、強れつな、すごい、プーンとくるにおいがして、くさいです。

皮をむいたものを乾燥させます。これを小さなたばにして、なわでくくるとできあがりです。かんたんそうだけど、時間がかかり、育つまでの世話も大へんで、すごく大へんな仕事です。警察の人もし時々くるし…。

★大だいまつをつくり方（宵宮の日、男の人たちがする）

宮宿の人が1年前にきりたおし、よく乾燥させておいた竹を、まわり1 mほどにたばね、なわでくくります。これもきちんとくくつとかなないと、変なもえ方をしたり、はずれたりしたら、大へんな事になります。長さは6 mほどあります。すごくおもいです。

10月23日(宵宮当日)の仕事

この日は大いそがしで、朝からは宮宿の人が神社のそうじにいきます。(上と下の宮宿どちらも) それから、かいとの男の人達が「ごくあげ」をします。「ごくあげ」とは、おもち(ごく)を神社におそなえるように準備することです。

夕方5時に、村の家各1人ずつが集まり、ごちそうを食べたり、飲んだり、さわいだります。その用意を昼ごろ、男の人がします。

人身御供(ひとみごくう)と昔からいわれている「みきいただき」に、近くの女の子2人が5時ごろに宮宿の家におよばれにきます。

着物をきて、きれいにお化しょうをします。夕方、昼ごろから宮宿に来て手伝っている、かいとの人や、しんせきの人などにごはんを食べてもらいます。

7時ごろ、火をたき、たいまつに火をつけます。大だいまつを男の人10人ほどがもちあ



▲ つくられたおもち(御供)



▲ 大だいまつをかつぐ

げ、宮宿の家の庭へ入り、たいまつをほうりあげ(上になげ)ていわれます。

その時は、感動的なもので、みんなだれの顔をみても、涙をうかべています。しかし、炎が大きいので、家にもえうつらないか、ちょっと心配です。大だいまつは、村中をねり歩きます。その後を、ちょうちん、おみき、ごくなどをもった男の人たちがついていき、その後に小だいまつをもった子どもや、他の大人の人などがついていきます。

かけ声は「よ～いと、かあ～いと」といいます。これは「よいかいと」という意味だそうです。神社は、急な石の階段の上にあるので、大きなたいまつをかついでのぼるのは一苦勞で、一つまちがえば、大けがをしてしまいます。上(かみ)と下(しも)とのちょうどまん中ぐらいにある神社には、ほとんど同じくらいにたいまつがつきます。

2本のたいまつは、神さまの両方にたてられます。4年ほど前、そのたいまつがたおれ

て少しけが人がでてしまったこともありました。

役員の人などが集まり、1時間ほど宮司（ぐうじ）さまがきて、いっしょにおいのりします。その後、上、下の2つのあまぎけをもらってのみ、みんながのみおわると、おまちなねの、ごくまきがはじまります。

ごくまきがおわると、役員の人、村の人、親せきの人などが宮宿に帰ってきて、ごちそうを食べたり、飲んだり、さわいだりたのしくすごします。

宵宮の夜は大へんにぎやかで、たのしいです。大だいまつをかついでいる人たちは、「はっぴ」をきています。そのはっぴは、肩のころなど、火の粉でやけて穴がいっぱいあいています。それに、一番先端をもっていた人の髪の毛は、火で「じじばけ」てしまうそうです。

〔注記〕

昭和63年の秋祭り、特に火祭り（宵宮）の行事を中学生の細川さんが観察した記録です。

⑧ 牛耕についての聞き書き — 生駒市南田原 —

浦西 勉

〔談話者〕 山上文雄氏（明治44年生）／ 山上ウエ氏（明治44年生）（昭和51年5月8日調査）

牛 耕 に つ い て

昔、牛は農作業に必ず必要であった。

苗代作りに使い、田植前の、田おし作業には牛が必要であった。「ヨメサンは一人、ウシは一匹、家に居るもの」と冗談に出る程であった。山上家の牛は、以前の牛と今の牛を、4年前に河内の人と交換した牛である。

（東大阪市あたりで交換）

牛は大切なもので、全てウチウマといって、家の中に牛を入れておいた。南田原の川むこう（西）は、河内矢野五千石の領で、牛がその矢野領にゆくと、とりもどすことができなかったの、ウチウマにしているともいう。

また、国境はウシヌストが多かったそうであったので、ウチウマにしているともいう。

調査の日（5月8日）の牛は、ワリタという作業中のところであった。ワリタというのは、田を最初にカラスキですいてゆくことであって、これは同じすじを4辺すくのである。

次に、もられた土の上へカラスキをつっこみ、ワリタしたところを土で包むのをツツミと言う。こうした作業を牛の力を使ってするのである。一人前の男であれば、1日1反たがやすことができた。

朝7時ごろから、暗くなるまでが、1日という仕事の単位であった。「一反マルメル」というのは、1反の田をたがやすことを言う。

牛を使う男性を、マゴと言う。

山上氏は、17才（かぞえ年）の時から、カラスキの使い方を学んだ。

牛でやっても、どうしても田のスミが、たがやせないの、ビッチュウで、スミカジリという作業をする。

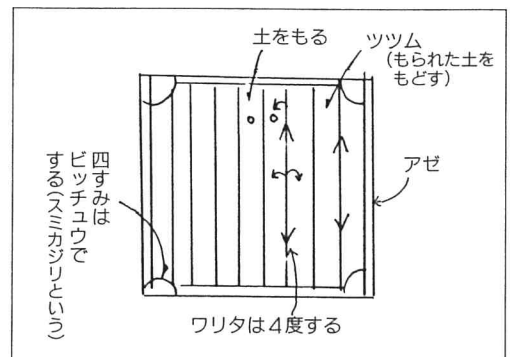
牛ですいたあと、クワ（平グワ）で土をコナゲル作業をしてから、水を少し入れてアゼヌリをする。そして、田に水を入れてマンガで土をこなげて、イタマンガで水面をならして、田植えのできる状態になる。

マンガするまでに、シロカキをするところもある。

牛 の 使 い 方

先に書いた、ウチウマというのは、家（土間）の内ですむウシのことである。ウチウマと言うので、ウマかと思うがウシである。

牛には毎日3食、食べさせる。麦、コゴメ



▲ ワリタの方法

1升ずつ、その他ワラクズ、イモ、ジャガイモなどいっしょに炊く。そして、トライに入れる。ヌカもこの時入れる。

毎日朝、ワラーソクを、オシギリで切って、ウマゴヤに入れる。一ソクとは16把のことである。一週間に一度、ウシがふんだワラを出す。これをウマヤコエといい、昔は田圃のコヤに入れておいた。今は田圃につんでおく。

牛の動きは、チャイチャイで、牛に向かって左をたたくと（マゴにとってみると右をたたく）右へまわる。（マゴからみると左へまわる）オウオウで止まれ。

マゴからみて、右へ動かす時、つなを引っぱる。

シー、という牛が動く。ジョリジョリといってひっぱると、うしろに動く。

牛をつなぐ紐の詳細は別に記す。

牛は大正年間頃、奈良の菅原の天満さんにまいていた。10月頃と記憶している。

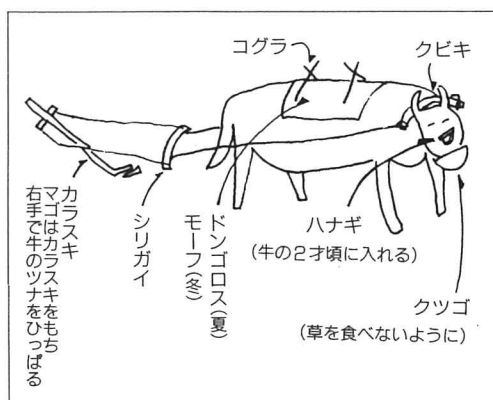
そ の 他

田植えは、女の人やるが、1人で5畝～8畝が、ナエトリと田植えの1日の仕事量であった。昔は1反といったが、なかなかできるものではない。

山上家の田圃は8反半である。今日、家族は老夫婦、若夫婦（主人—公務員）、子供（小学4年生）の5人であり、田は老人とやとい

の人2人（近所の人）でやっている。

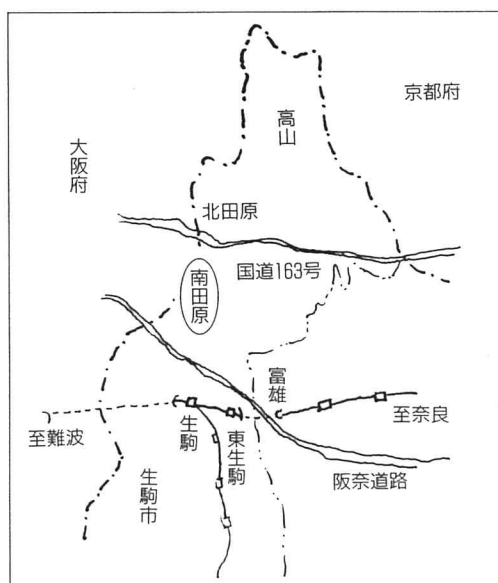
山上氏は、耕運機も使っているが、氏の持つ何枚かの田圃は、グリという田圃の中に数ヶ所、水のふき出るところがあり、そこに耕運機が入ってしまって動かなくなるので、牛を今も使うと言う。たとえば小字の小原がそういう田圃である。グリは水と天然ガスとが出てくる。水のない時は、グリは田は良い田である。グリに対して、田圃全体のしるい田をドタといい、南田原にもある。



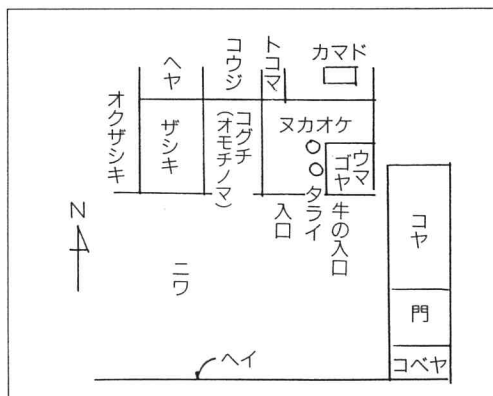
▲ 耕作する牛の姿



▲ 耕作する牛の姿



▲ 生駒市南田原の位置



▲ ウマゴヤの位置

⑨ 天川村沖金の民俗聞き書き

浦西 勉

① 赤井チカエ氏(明治17年生)の話

① モリサン(沖金小字千軒平)のいわれ

シフク山の「行者(ギョウジャ)ガエリ」といわれるところで、モリサンの一番のオヤ(親)サンが、子供をそだてておったところ、赤井氏の先祖の獵師がその子供をふみころした。

その子供はシラカワサン(ヘビのこと)であって、天ノ川へながれて来たのを赤井の人がみつけて、赤井の土地へまつたのが、このモリサンの始まりである。

田圃が沢山その近くにあり、それを守(モリ)してもらうために、モリサンと称するのだとも言っている。

ギョウジャガエリ(地名)とは、そこを通る行者さんが、そこにいる大きなシラカワサンを見てはひきかえすので、この名がある。

ヘビのノタレタ(あばれまくった)アトがあつて、そこがツボンコ(穴)になっている。

シフク山は、沖金から南へ15km行ったところの山で、3時間かかてのぼる。

弥山のショウボンサン(仏像)は、あまだれになっているので、そう呼ぶ。その目に金を入れてあつたのがぬすまれた。

② 地名の伝説

○ミタライ(地名)は、3つのタライがあり、そのミタライにえらい大ジャがおつて、その3つめのタライをおよいだ者は、米5斗やるといったので、およいだオバアサンが居る。

その人をゴトババといい、その人の泳いだあとから、赤いヘビがついて行つたと言う。○ミノウズミ(キトウズミ)の弁天さんのまつてあるところに、ドイライ石があり、その下に穴があいている。

子供の頃聞いた話しに、毎ばんオトコマエのオトコがヨバイに来るので、みんながどこからくるのかしらべようとして、赤い糸をシルシにつけた。

その糸をたどってゆくと、その弁天さんの穴へ入っていったという。

そのヨバイされたムスメサンは、タライに3周するヘビの子を生んだそうである。

○カンノンミネに観音さんがまつてある。観音さんは、大きいイワクラにあり、その下に小さな穴のあいたところがある。

その穴をのぞける人は少ないという。

後醍醐天皇がかくれていたところでもある。

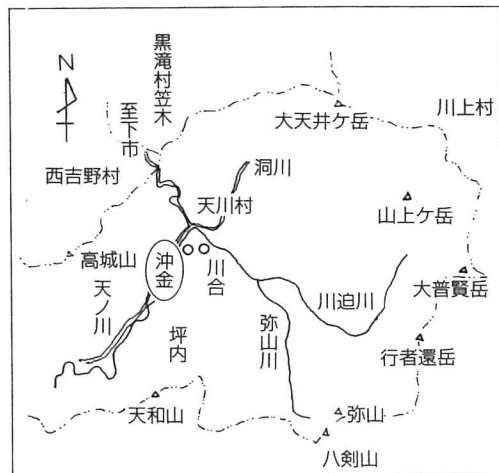
③ オトナ座のこと

オトナ座ということをここで聞く。

オバアサンの生まれた家はオトナ座の主要な一家である、寺井家であつた。父が寺井松太郎であり、その長男が寺井重太郎であつた。

チカエさんの先祖に寺井出羽守と、北畠中納言という夫婦も居たという。

オトナ座といわれる家(イエスジ)は、寺井・岡谷・掘井・森岡・井ノ瀬・中通である。



▲ 天川村沖金の位置

1月10日頃から2月10日頃までに、当番の家で“座”をタク。

それはゴチソウをこしらえて、オトナスジをよび、後醍醐天皇さんの遺品をまつるのである。遺品には、ヨロイ・刀・カブトなどいろいろあり、あげくのはてに、沢原の奥にある五色谷で、戦争のあつた時に口ヒゲがじやまなので、口ヒゲをひきぬいたそうだが、その時アゴのカワまでつuitままぬけたもの、などがあるという。

寺井重太郎さんがかつぐと、これらの像はかるくもちあげられるが、他のオトナスジのものがさげると重いので、最近まで寺井重太郎さんが保管していたが、最近亡くなってから一軒ずつ回しもちとのことである。

その後醍醐天皇の遺品は、4畳の部屋に一杯あるという。

五色（ごしき）という村の名称は、後醍醐天皇さんが戦いして、その血をながされたので五色というそうである。

五色谷にはメグリ石があり、馬のヒヅメのあとが二つのこっている。

㊦ 弘法大師とクサモチの伝説

弘法大師が、笠木の村でもちつきの時、門口にたつてクサモチ（ヨゴミモチ）をくれと言ったそうだ。その時笠木の人は、このモチはニガイといった。

弘法大師は、それではこの村のヨゴミはみなニガクしておこうといった。

それ以後、笠木のクサモチはみなニガイという。笠木の人はみな天川までヨゴミをとりにくる。

又、天川ではヨゴミは一年中使用できるように、ユガイてからほしている。

モチツキは、28日・30日にする家が多く、29日はクがつくといいつかぬ。

モチはクサモチ（ヨゴミモチ）・キリモチ・ネコモチ・チギリモチ（オロシをつけてたべる）・ヌタモチ（ヌタエ・アズキ、をつけるくアエル）・チュウベイ（カサゴクのこと。チュウという人が一人このモチをひらったのでこの名がある）

② 堀井武雄氏（明治31年生）の話

現在沖金住（沢原生まれ）。

私の6・7才の頃、おじいさんにつれられて下市に来ていた。だからオトウサンからの話しの記憶はその頃までしかない。

オトウサンは、嘉永6年生まれである。オトウサンの20歳頃に、天和鉾山へ荷を運んでいたということを聞いた。天和鉾山とは和田にある。オトウサンは、ゾウツキ（胴ツキ）をして、マッチのジクをつくっていた。木はモミの木を使用。

大阪へ、マッチのジクを出しているのは、

天川でオトウサン一人であり、工場も5・6ヶ所あった。今とちがうのはあかりである。昔は松の根のジンを鉄の台から70cm程上に、鉄のサラをつくり（）、それに松のジンをたいて、そのまわりでサイホウ・ベンキョウウチのコトをしていた。

タネアブラは新しいことだし使わなかった。

時計もそのころなく、太陽で見ていた。

「ガッコユキ（テラコヤ）アガッテクルのはナナツ」などといったりもした。村でその時刻をズバリ当てる人も居た。

火を起こすのは火ウチ石でした。左手の人差し指で火ワタ（イシワタ）と火ウチ石を持ち、右手に鉄をもち、カチンとあてると火のこがとび、その火のこが火ワタにつくと、ふいて火をおこした。

私の生まれた村は、高野街道という路の通路であるので、当時行者さんがよく通った。

子供をせおった行者さんらが来たこともある。

村の子供らは「行者行者ものくれん行者、アメ（雨）にあへ、風にあへ、テングサンにつかまりようど」と言って、行者さんについてあるくとダンゴなどくれた。

行者さんは全国から来た。

下市までは6里ある。

③ 水口奈美氏（明治27年生）と赤井糸枝氏（昭和8年生）の話

モチツキは12月28日か30日。今は一軒の家で1斗なら多い。5升ぐらいだ。オカキは2月頃する。タテウスでつく。アエモチというのは、アズキをつけたモチである。

アワモチ・キビモチはつくったが、今つくらない。コナというのは、ウル米をコナにして、それをむしてもちにするのをいう。

1月14日はトンドといって、村ニンソクで一軒に一人出てゆく。竹・木・ワラなどで大きなものをつくりもやす。

方角も定まっている。それにあたると元気になるという。田圃の中でする。

旧暦と新暦とかわったのは2・3年前。

あとがき：以上の聞き書きは、昭和51年12月28日に行ったものである。年末の山村では各家でモチツキが行われていた。

短信 — 民俗博物館へのおたより —

十津川村高滝の山の神まつり

ここに紹介したのは、田口重晴氏(大正2年生)に山の神についておたずねしたことについて、その返事の手紙です。おたずねした事項は次の通りです。

- ① 山の神のまつりの日について。
- ② 山の神をまつっている場所。
- ③ 削り花を作るか。
- ④ 供えものについて。

お問合せの件は次の通りでございます。

1. 山の神の祭りは、旧暦11月7日ですが、最近是新暦の11月7日にする所が多いです。
2. 山の神様は各村々に壱ヶ所です。山の神様の祭る所には必ず古い木とか大きな木があります。私の村にも馬目樫の大木があります。幹廻りが3米近くあります。高さも10米を越します。樹齢は400年位でしょう。馬目樫としては珍しく大きいものです。



▲ 田口重晴氏(十津川村高滝住)

3. 山の神様に削り花を供える所が少なくなりました。形や見本はありませんが、私は若い頃作りましたので知っています。暇をみて作ってあげます。
4. 山の神様へは小豆団子とサンマのすし又はサンマの頭としつ尾を切って供える。勿論お酒に果物なども供えます。サンマの頭としつ尾を供えたのが、他の神様に供える供え物と変わったところがあります。最近ではサンマずし又はサンマ1尾供えるようになりました。

次に山の神様は御承知の通り女の神様です。大山津美之命と記されています。昔は女神であるからと言って男のシンボルを木で作って供える者もあって、旧暦の11月6日の晩は山小屋に祭壇を作り供え物をして拝み、山男達が太鼓を叩いたものです。そして翌日7日には山の仕事を休んだ。今では一寸派手な祭りになって、山の親方達が折詰を配って廻ります。まあ、こんなような次第です。今年も暖くなりましたらおいで下さい。

平成元年1月10日

奈良県内の風俗・習慣などについて お知らせ下さい。

伝統的な行事や風習が、少しずつ消えさうとしています。

- 私の村には、このような祭がある
- このようないつたえの地藏さんを祀る
- このような民謡が残っている 等々
- ハガキ・便箋・原稿用紙・写真、何でも結構です。お知らせ下さい。

お 知 ら せ

特別展示の予告

【展示名】「大和のはたおり用具」展

(仮称)

【展示期間】 平成元年7月22日から
平成2年8月31日まで

【展示主旨】

はたおりは現代では忘れられてしまった家の暮らしの中での基本的な生活技術の一つでした。また大和では江戸時代～近代初頭にか

けて、奈良ざらし、大和緋などとして知られる有力な地場産業でもありました。今回の展示では、館蔵品を中心にこれら県内で使われた織物に関する様々な用具を紹介します。

ご期待下さい。

平成元年7月1日から7月21日まで展示替えを行います。

【正誤表】

通巻第55号には次のような誤りがありました。おわび申し上げます。

- ・1ページ左行1行目 (誤) 昭和⁶³年度 → (正) 昭和⁶²年度
- ・2ページ写真説明 (誤) 井上富夫宅 → (正) 井上富夫氏
- また次の字が消えておりました。
- ・2ページ 左行37行目 …新しく染液…
- ・8ページ 写真説明 コシキ (…張られている。)